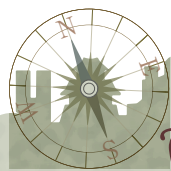


May
号外
2021

過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞

上町台地 今昔タイムズ



上町台地 今昔フォーラム

U-MACHIDAICHI-KONJAKU-TIMES
vol.15 Document



発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL) / 企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング
問合せ先 tel.06-6205-3518 (担当: CEL 弘本)
ホームページ <http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html> ※U-CoRo=ゆーころ (上町台地コミュニケーション・ルーム)

2020年11月発行の「上町台地 今昔タイムズ」vol.15の関連イベントとして、2021年3月22日(月)夜、同号のキーパーソンによる「ダイアログナイト」を開催、オンラインでLIVE配信いたしました。
テーマは「この地で次世代を育む、キーパーソンが対話を通して共に築く ― 未来へのブリッジと上町台地の力」。
異なるバックグラウンドから、次世代を育む実践を展開されている方々が春の夕べに集っていただきました。問題の捉え方や解決に向けたアプローチに“ことば”“表現”“身体”といった、相通じるリアルな視点をお持ちで、熱のこもった対話(ダイアログ)が実現。
コロナ禍からその先へ、上町台地を横断する点と点がつながり、対話を深めて、実践の知を共有・発信し、未来へのブリッジを共に築いていく機会となりました。

「上町台地 今昔タイムズ」*vol.15では、1面で幕末から戦前に向け、大災害や感染症の流行、貧困問題など、社会の歪みが生み出す苦難に対して、市民の命と暮らしを支え将来の希望につなぐべく、先導的に取り組まれていった社会事業の大きな流れを概観。2面は現在の大阪・上町台地周辺で、まさに今、激変する社会と新たな課題に向き合い、ソーシャルマインドを受け継ぎ、未来を生きる子どもたちを対象に取り組まれている、4つの事例に学ぶ機会となりました。

*プロジェクトの詳細は、ホームページ「大阪ガス CEL」「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。



▲壁新聞
「上町台地 今昔タイムズ」第15号(1面)



上町台地 今昔フォーラムvol.15
2021年 春の上町台地ダイアログナイトを
開催しました(オンラインLIVE配信)



この地で次世代を育む、 キーパーソンが対話を通して共に築く ― 未来へのブリッジと上町台地の力

Silent Voice × クロスベイス × 空堀ことば塾 × 天使のミール go-on



U-CoRoプロジェクト・ワーキング
のライブ配信
157 回視聴・1 週間前に配信済み
6 0 チャット 共有 オフライン...
U-CoRo プロジェク... 登録済み
チャンネル登録者数 3人

- 開催日時: 2021年3月22日(月) 19:00~21:30頃
- 開催方法: オンラインLIVE配信 (Zoom画像をYouTubeでライブ配信)
※大阪ガス実験集合住宅NEXT21交流室をスタジオに
- 出演者: 尾中友哉 (NPO法人Silent Voice 代表理事)
宋 悟 (NPO法人クロスベイス 代表理事)
堀 狼星 (空堀ことば塾 主宰)
〈藤井 恵 (天使のシフォン go-on オーナー)〉※コメント紹介 (敬称略)
- 進行役: 弘本由香里 (大阪ガスCEL 特任研究員)
- プログラム:
 - ・プロローグ: 「上町台地 今昔タイムズ」vol.15から上町台地を俯瞰する
 - ・ダイアログ: 「上町台地 今昔タイムズ」vol.15のキーパーソンによる対話
- 主催: 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
企画: U-CoRoプロジェクト・ワーキング

<ダイアログナイト>

この地で次世代を育む、キーパーソンが対話を通して共に築く
——未来へのブリッジと上町台地の力

Silent Voice × クロスベイス × 空堀ことば塾 × 天使のミール go-on

出演者:

尾中友哉 (NPO 法人 Silent Voice 代表理事)

宋 悟 (NPO 法人クロスベイス 代表理事)

堀 狼星 (空堀ことば塾 主宰)

藤井 恵 (天使のシフォン go-on オーナー)

進行役: ※コメント紹介

弘本由香里 (大阪ガスCEL 特任研究員)



<バックグラウンド>

聞こえない子が自分らしく生きることができる
社会に向けて

尾中 友哉 (NPO 法人 Silent Voice 代表理事)

おなか・ともや

Silent Voice は、聴覚障害がある子の総合学習塾「デファカデミー」を運営している。



上町台地に感じる強い縁

自分は吸い寄せられるように、この地に来たように思います。かつての大阪市立聾学校、現在の大阪府立中央聴覚支援学校が会社の近くにあります。そこの第6代校長の高橋潔先生は、明治に生まれ、大正、昭和にわたり活躍されました。

一方で、大正時代に僕の生まれ故郷の滋賀県出身の西川吉之助という人がいました。娘さんが難聴だったので、当時アメリカで出てきた聾教育の「口話教育」、発音をした話者の口を読み、音を活用するという流れを日本に持ってこられた。娘さんと一対一での訓練を続けますが、口を見て理解しなさい、声を出しなさいということで、そこでは手話は許されないわけです。

そのインパクトは強く、全国行脚もされて、当時の文部省も日本の聾教育は口話教育でいくという方針になったときに、高橋先生の大阪市立聾学校では手話を貫いた。聞こえない子どもの言葉は手話なのだと、一校のみで対抗した。そういう話を先日読ませていただいた。

それから100年後の大阪では、聞こえない子どもの手話の獲得等を保障する手話言語条例ができました。僕も大阪府の条例評価部会委員を務めているんですが、森之宮の府立施設で「こめっこ」という子どもと保護者の手話獲得・習得を支援する全国的に注目度の高い施策が展開されています。

歴史をよく知らない僕が、強く縁を感じたのは、高橋潔さんを描いた映画をつくらうとなって、実はその役を僕がつとめることになったのです(笑)。

聞こえない両親のもとで育つ

自分は平成元年生まれ。両親は耳が聞こえなかったのですが、そこに生まれ育った僕に、両親が語りかけてくれる言葉は手話でした。保育園に行くようになって外の世界に接した時に、僕は他の子に手話で話しかけたそうです。思い出したのは、ある男の子に近づいていきなり手を使ったので、その子に「魔法使いみたい」と言われたこと。その言葉を聞いて、僕は、悲しいとか嬉しいとかでなく、「魔法使いって何?」と思った記憶がよみがえります。同じ日本語だけど、手話と発語との二つの言語の間に壁があったということですね。

5歳ぐらいになると、僕は両親の通訳を日本語と手話でやっていました。その時には自分の役割に気づいていたんです。「小さなお父さん」と呼ばれて、通訳

者になって育ちました。

このコミュニケーション意識が僕に与えてくれたものが大きかったと思います。綺麗な声の女性が突然電話をかけてきて「お父さんかお母さんはいらっしゃいますか?」と。「両親は聞こえないので、かわれませんか」というと、裏で「このガキ、うまいこと断わりよんなあ」と声を荒らげて言う(笑)。これを両親に手話でどう伝えるか。状況を一度理解してからでないと難しい。そういう意識が幼いときからあったと思います。

こういう話をすると、苦労したねとか、健常者は難聴者を助けないとね、と言われてがち。でも本当のことを言うと、僕にはできないことがたくさんあって、それは両親が僕にやってくれたわけです。家族の中で、助け助けられることによって、相互の関係性をもてれば、健常者が上で障がい者が下だとかとはならない。ただ人間だなという思いがあるだけです。

僕は平成元年生まれで、この30何年のことを考えると、昔の両親は電話ができないので、料理の出前が取れなかったけれど、今はスマホのアプリで注文できます。聞こえる人と聞こえない人で構成される社会での両者の壁はテクノロジーによって下がってきたような感覚はあると思います。そうしたことをしっかり受け止めて、社会の中で新しいあり方を模索していく役割が僕にはあるんじゃないかと。何かそこで価値を発揮する仕事をやってみたいと思ったのが、東京で社会人になって2、3年目のときで、本当に突然電撃が走ったんですね。自分の使命というものを感じ取ったっていうのを覚えています。

コミュニケーションの本質とは

母は、喫茶店を滋賀県の大津でやっ

ていまして、始めるときには、お客さんの声が聞こえないじゃないかと、周囲は大反対。そのお店がもう13年になるということで、僕よりよっぽど長い経営者なんです。ずっと黒字でやってきています。

働きぶりを見に行くと、お客さんの「アイスコーヒー1つ」ってのがやっぱり聞こえてないんです。けれど、お客さん同士で紙に書いてやっちゃう。僕は母に、お客さんはくつろぎに来ているのに迷惑だろうと指摘していました。そうしたら母は、「一回助けられたら、二回助けるつもりでやっているんです!」って、僕を一蹴したんです。母は聞こえないからよく見ています。その分、お客さんに対する気遣いは、ちゃんとしている。

そういうコミュニケーションのかたちは面白いなと思って、僕は聞こえない人が講師を務めるコミュニケーション研修をつくったんです。参加者が聞こえる人たちです。それがメディアにとっても分かりやすく、マイナスと思っていた特性がプラスに使われているということで、好意的に取り上げていただいたこともあり。そういう価値を提供してお金をいただくという活動を株式会社で私たちはやっています。

聞こえない人の雇用については、大阪の地はとてもゆかりがあります。松下幸之助さんのご親族に聞こえない方がいらっしゃったということから、松下さんと、シャープの早川さんなどが手を携えて、障がい者が活躍する社会をつくらねばならないということで、戦後に障がい者雇用が始まったというふうに聞いています。

聞こえない人を雇用する会社、1社では最大800人ぐらい雇用している会社もあります。ただ、そこで今も起きていることは、社内資格の研修に手話通訳が付

けられずに受講できないなどといった問題です。50年も経つと、それはすっかり給料の差、地位の差になってしまう。頑張りたい人に頑張れる場所がないことには、やはり理不尽さを感じます。

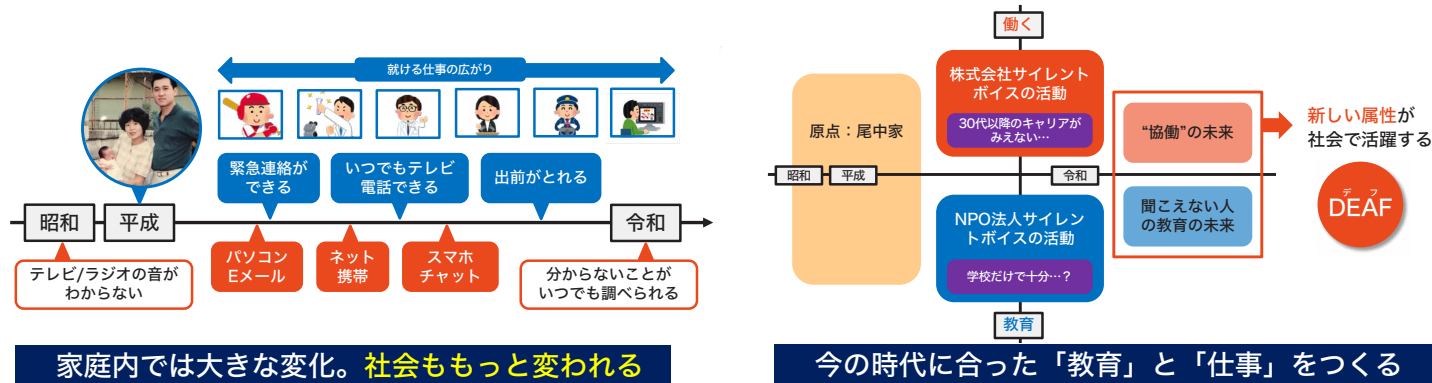
誰もが自分らしくいられる社会

例えば、聞こえる子と聞こえない子どもと一緒に遊ぶうよとなって、鬼ごっこしたい、かくれんぼしたいとかの声が上がる。多数決になって、決めた後は、聞こえない子には、グラウンドに「鬼ごっこになりました」と書いて伝える。聞こえない子にはプロセスが入らない。結論を知って動くことが習慣化してしまうと、受け身になりがちで、自分で考えた経験が少ないとか、自分のやりたい遊びをみんなと一緒にできないということになってしまう。

そういうことで、僕が谷町6丁目の拠点で始めたのが、聞こえない子たちの総合学習塾でした。現在の利用者の様子を見ると、少なくとも子どもたちの居場所としての役割は果たしているのかなと思います。

コロナ禍では、地域を越えてオンライン授業も展開していました。聞こえない先生を目指している大学生が入ってくれて、1番下は4歳の手話で勉強を教える場などで、コミュニケーション手段を子どもたちに合わせて対応しています。

目指しているのは、教育によって子どもたちに成長の機会をつくっていくこと。子どもたちが活躍しやすい仕事や職場を増やしていったってイキイキと社会に参加すること。聞こえる人と同等を目指すよりも、テクノロジーも活用しながら聞こえない人が自分らしくいられる社会づくりに寄与したいと思って活動しています。





<バックグラウンド>

■多文化の子が共生できる地域の未来を求めて

宋 悟 (NPO 法人クロスベイス 代表理事)

そん・お

大阪・生野コリアタウンを拠点とし、子どもの教育格差の是正と地域まちづくりに取り組む。

在日3世としての人生の転機

私は在日コリアン3世です。祖父祖母が朝鮮半島で生まれて、こちらにやってきた孫の世代。2年前に息子に子どもができたので5世が出てきました。私自身、母方の祖母は日本人ということで、4分の1は日本人ということになります。ただ何をもって日本人というのかは大論争になってしまいますので、今日はやめておきます(笑)。今は生野区のコリアタウンの中に事務所をかまえて2017年からクロスベイスというNPOを始めています。

生まれ育ったのは三重県です。伊勢神宮近傍の高校に通っていました。青春時代の場所ですけども、実は高校を卒業するまでは、自分が在日コリアンであるということに対しては否定的な思いをもっていました。

大学は京都で1980年に入学。何の希望もなくほぼ無気力状態のなかで入りました。私の記憶では当時はまだ在日コリアンが例えば日本の大きな企業に就職できるかという、そういう選択肢はなく、就活をするとか、公の職に就くとかということとはほぼなかったと思います。

私は大学に入ってすぐ変わったんです。1980年は韓国の中の民主化運動が非常に高揚した時期でした。光州民衆抗争というかたちで民主化を求めた学生と

市民たちが立ち上がったときに、当時の軍事政権下で大弾圧がありました。

そのとき、私と同じ世代の大学生たちが自由とか民主主義を求めて立ち上がって、傷ついたり亡くなったりするわけです。そういう姿を見て、私は心臓を掴まれるような思いをしました。いったい自分は何をしてきたのだと。自分のことが、本当にちっぽけに思えてきて、衝撃的な経験でした。そこからそういう活動を支援する活動に入って行くわけです。

それまで私は通名、日本名を名乗っていたんですが、一方で在日コリアンということは自分のアイデンティティの核、避けて通ることができないものでした。それで、もうありのままに生きようと、そのままに生きようと、それでいいじゃないかと半分開き直ったし、ある意味励まされた。その時の経験とか大学時代の活動で自分の人生が大きく変わったということです。

地域のことを主体に考える

クロスベイスは2017年にできたんですが、その前の仕事は、大阪でコリア系インターナショナルスクールを設立する初期メンバーでした。在日コリアンにはいろんな民族学校がありますが、自分たちが理想とする学校をつくらうと思ったんですね。それで、その構想に参加し、その後6年ぐらい事務局長をして、2016

年の3月に早期に退職をしました。

本当はそこでもう少し、自分なりにやりたいと思うところもあったんですが、よくある組織の中での考え方の違いなどで辞めることになりました。理事会に、この文言が来たらもう叩き付けるしかない、ということで、辞表をポケットに入れて臨みました(笑)。今振り返ると、私には至らなかったことも多かったなと思います。

そのあとは、人生の残りに何かできることがないかということで、若い相棒と時々喫茶店で会って、1年ぐらいはあれこれ話をしていました。結局、「多文化」「子ども」「地域」をキーワードにしたNPOを立ち上げることに決めました。

生野区の区民13万人のうち2万8千人ぐらいが外国籍住民で、5人に1人以上。比率で言うと実質的には日本で最も外国人がたくさん暮らす地域だと言えます。私は「日本で最も世界に近いまち」が生野区だと言っています。もうひとつは、子どもの貧困化。生野区の公立の小中学校では、給食費が低所得家庭に支給される就学援助率が3人に1人以上になっています。実際はもうそれよりも多く、中学生なんか多分4割近いでしょう。

さらに少子高齢化。生野区の12の小中学校は4つの小学校に統合される計画が進められています。それぐらい少子化が進んでいる。上町台地を見るとどんど

んタワーマンションが建って、地域によっては校舎が足りないくらい。逆に生野では、子どもが激減しているという状況で、課題先進エリアだということです。

貧困の連鎖を越えていくために

よく貧困の連鎖ということがありますが、よく貧困の連鎖ということがありますが、ある人に言わせるとその原因は経済格差だけじゃなくて家庭環境の格差だと。親の経済格差だけじゃなくて親の持っている文化資本ですね、家庭の文化とか教育の環境、あるいは親の社会関係資本、親の人脈とかネットワークとか、そういうものの総体が、子どもの貧困につながるという説明があります。

今クロスベイスでは、学習のサポート教室をやっています。特徴で言いますと、通っている子どもたちは43人くらいですけども、8カ国ほどの子どもたちが関わっています。韓国はもちろんベトナム、中国、フィリピン、タイ、スリランカ、ネパール等々ですね。多文化のいろんな子が参加しますし、不登校の子どもたちも参加しています。

それともう一つは、単に勉強を教えるということだけじゃなくて、体験活動をしています。「広い世界、異なる他者、未知なる自分」を発見しよう、ということです。

例えば、地元のロート製菓さんに協力していただいてハンドクリームのづくりのワークショップを行いました。商品開発にもアイデアを出したり。ある子は汗が出ないようなハンドクリームがあればと。それを聞いたときにロート製菓の研究員の方も子どもたちのアイデアに大きな関心を寄せていました。

大学のキャンパスツアーにも行きました。ウチに来ている子たちの場合、大学進学ということはあまり想定をしていない家庭が多い。そこで、立命館大学に行って、大学生がどんな勉強をしているのかを知るために、一緒に話を聞きました。その時は東日本大震災の報告があったんです。子どもは興味津々。それに大学に行くといろんな施設がある。穴が開いているようなスペースがあったんですけど、それは何に使うんですかって聞いたら、先生がそれも含めて自分で考えるん

だよって。子どもにしたらスクール形式で勉強しているのが当たり前なんですけど、いろいろあるんだってことを知る。

地域の核づくりを共に考える

一方、コリアタウンにある御幸森小学校が来春廃校になるため、その跡地の活用についても議論しています。

大阪では、そのまま売却するケースが多いのですが、生野区は長屋が多いので災害が起こった場合、防災施設の機能を果たさないとダメだということがあり、さらに学校は地域コミュニティの核でもありますから、それがなくなつた時のことを考えて残して活用していこうということになっています。

生野区は事業者を公募して優れた提案に施設を貸すというスキームです。事業者には賃料や維持管理費もかなりかかりますが、せっかくだから地域で自分たちができることをやっていけないかと、3年ほど前からまちづくりの構想を練っています。仲間たちと組織を立ち上げ、その実現に向けての活動もしています。

<バックグラウンド>

■ことばと身体から広がる健全な自我意識

埴 狼星 (空堀ことば塾 主宰)

はなわ・ろうせい

シュタイナーの教育観をベースに、大阪・空堀の地で教育芸術の実践に取り組む。



上町台地が出発点の空堀ことば塾

空堀ことば塾は、2006年から始めたのですが、5年ほど前から、一般社団法人と並行して個人事業でやり始めました。私のアイデンティティとしてはやはり個人というのを大事にしたいなというところがありました。

私は宝塚市の出身で大学時代は京都にいて、35歳で結婚してから、大阪の京橋に住みました。グランシャトーあたりに行きますと、昼間から赤い顔をしているおじさんたちがいる。幼子を背負って散

歩していると、みな子どもに優しい。私が若い頃に人類学の調査研究で行っていたアフリカの人たちに近い自由さがある。初めは馴染みにくいのですが、そのむき出しの人間性みたいなものには惹かれるところがありました。

妻のお産が終わって国立大阪病院(当時)の近くで借家を探し、そこで住むようになって初めて上町台地の岩盤みたいなのを足の裏に感じるような感覚を持ちました。ここだったら生きていけるかもしれないという感じ。当時は研究者、大学の講師などをしながら、40歳近くになった時に、俺はもうこんなことしている場合

じゃないぞみたいになって、やっぱり何か人の役に立つような仕事がしたいという思いに駆られます。研究も、アフリカとかインドネシアとかマレーシアの何々族とか言われても、それは意味のある仕事かもしれないですけど、いったい自分自身の人生とどう重なるのかと。

40歳になって、人類学の研究は潔く辞めて、地域に関わりながら仕事をしたいということで、教育を選ぼうと決めました。普通だったら大学を卒業して教員になるのですが、20年近く時差があつて、ことばをテーマにした私塾のようなものをつくりたいと思ったわけです。

なぜ生野区なのか？

高齢化率31.4%、独居老人率20.6%、空き家率22.4%、「12小学校・5中学校」を「4小学校・4中学校」に再編

多国籍化・多民族化

子どもの貧困化

超少子高齢化

66か国の外国籍住民の住居
(2019年9月末現在)

課題先進自治体

2017年4月設立

<NPO法人クロスベイス>
理念：差別と貧困をなくし、ともに生きる社会をつくる
事業：学習支援・体験活動・地域まちづくり

2019年6月発足

<NPO法人IKUNO・多文化ふらっと>
多文化共生をまちづくりの軸にすえた総合的・包括的支援拠点の構築にとりくむ市民主導のプラットフォーム

実施事業

1 学習サポート教室 DO-YA (どおや)

・毎週 月・水・木曜日
・宿題DO-YA (小学4～6年生)
16:00～17:20

・DO-YA (中学生)
1コマ目 17:30～19:00
2コマ目 19:20～20:50

参加人数

40人を継続的にサポート

(2020年2月現在)

実施日数 118日

(2019年4月～2020年3月末)

2 体験活動事業 DO/CO (どこ)

探求型・知識型・イベント型の活動を年10回程度実施



学習サポート教室



体験学習活動

大阪に連綿と続く私塾の伝統

大阪には私塾の伝統があります。緒方洪庵の適塾もありましたし、懷徳堂などの自由な学問の場があったわけで、私もそういう場をつくりたいと思いました。

アフリカに行っているときに、私は写真が好きだったので、子どもと空と猫の写真をあちこちで撮っていたんです。子どもたちは、生き生きとした表情を持っていました。反対に日本に戻ってみると子どもたちに元気がない。アフリカの子どもたちが、新月からちょっと三日月になった時に、それを見て飛び跳ねる姿を見ると、全身を使った喜びみたいなものが、日本の子には感じられなかった。

その時に、学びの場所は学校以外にもたくさんあっていいだろうと思いました。私は受験とか進学を悪いと思わないけど、やっぱりそれを目標にしてお金を積んで思いつき詰め込んで、競争に勝っていくというのが、これからの日本の社会、世界を明るくするとは思えませんでした。

手と足は世界とつながっている

子どもたちが喜びを感じるような教育はないかという模索しました。そのベースには、「ことば」とともに「身体」に対するものがあります。

さっき宋さんの話を聞いて、辞表を叩きつけたところをイメージしたんですが、懐から辞表を出して上からバシーンとやったのかなとか思ったんですけど(笑)。その時の手の振りですね、大谷選手が160キロの球を投げるみたいな感じ(笑)。冗談ではなく、人間にとって手と足からのつながりがすごく大事だと思います。それらが学校教育ではないがしろにされているという意識が非常に強い。

また、尾中さんが世界を受け入れてい

く鍵になったのは手話ですね。身体の中でも、手足ってのは人間存在と結びついています。手話であってもハグをしても握手であっても、それが互いの壁を超えていく鍵になるということは、お二人の話を聞いて共通して感じています。

40歳以降、私塾をやりがいろいろやっている時に、手と足っていうのはすごく僕にとって象徴的でした。それらが互いに人間を豊かにしていくのかというのを自分も感じてきました。

私が私塾をやるときのひとつの拠り所としたものにドイツのシュタイナー教育があります。私的に、簡単に言うと手足を育てる教育ですね。シュタイナーが言ったのは、人間の体というのは頭と胸や腹と手足という3つに分けるとすると、頭は考える、胸は感じる、手足は世界とつながるためのものであると。手足は無限に世界に向かっていくことができ、地球も抱っこすることができるわけで、人と人とを結びつけるものだと思います。

逆に、今の学校教育は頭を育てるところで、潰されている子がいっぱいいる。不登校とか学校に行けない子をたくさん見てきたので、そういう状況の中で頭に集中するんじゃなくて、手足をのびのびと広げて、いわば自由に踊れるような人を育てたいと思います。

ことばと身体の芸術を体験

上町台地はいろんな文化があり、落語もそうだし狂言でも能でもそうですし、生玉さんの祭りもそうです。ことばと身体を上手い塩梅でくっつけたような、それを芸術という形で結晶化させたような文化がありました。

例えば落語。小学生は落語を覚えます。毎年、落語会を高津さんで当初やっていました。高津宮の富亨の座敷で落語会



囲碁対局

をやらせていただくことが祝祭のような晴れ舞台でした。また、子どもたちとご老人の集まりとか施設に行くと落語をやらせていただいた。

百人一首も取り入れています。小学校2年生からの教え子がありますが、今は大学生で、百人一首のA級ライセンスをとりました。それくらい集中して愛してくれたのは嬉しい。それが次の子どもたちにつながっています。

また、囲碁には死活という言葉がありますが、相手の石を殺したり殺されたりするなかで一つのバランス感覚みたいなものが出てくる。互いに痛い目にあう。それを通じてだんだんと自分の筋道というか、人生を歩む術を学んでいるように思います。

水彩も描いています。空堀ことば塾と言っていますが、ことばとは、世界を統べる法則のようなものとして捉えています。これはある意味で手話に近いものがある。自分の世界を手を動かすことで表現し、色彩のなかで話しているようです。

最初は小学生対象でしたが、今は中高生もいて、その人たちと一緒にいろいろなことをやっています。例えば演劇。高校生にかけて演劇を真剣にやる。演劇教育は僕らの小さな頃に盛んだっけけど今は割と下火。自分の声を出すということでももちろん身体を使って手足でも表現していて、それが交わってくるところで初めて自我というのを他者と自分でも感じてくる。思春期の子たちとの演劇は他者を尊重するという



百人一首



演劇体験



落語の発表会

ことに対して意味を持つと思っています。自分が自分を肯定して人を活かすよう

なことばを身につける。人間は、しっかりした軸なり自我を持っているべきで、最

終的には、そういう子を1人でも育てたいという願いを持ってやっています。

弘本(司会) 生野区でシフォンケーキ専門店とこども食堂を運営されている藤井恵さんからは、ビデオでコメントをいただいています。

コメント紹介



＜バックグラウンド＞

未来につながる、心と身体に優しい店づくり

藤井 恵 (天使のシフォンgo-on オーナー)

ふじい・めぐみ

こども食堂「天使のミール go-on」をコロナ禍のもと、2020年3月から開始。



親と子どもが共に楽しめるお店に

グルテンフリーのシフォンケーキ専門店「天使のシフォン go-on」のオーナーで、こども食堂「天使のミール go-on」の代表、藤井恵です。

私がこのお店を開くきっかけになったのは、こども食堂をやりたいということもありましたし、子どもたちが自由に遊べるようなキッズスペースを備えるお店にしかたなかったからです。

自分が子育ての時に、子ども連れで喫茶店でちょっとお茶する、ご飯を食べに行くということが大変しんどかったという思いがありました。子どもは、どうしてもうろうろし、じっとしていられないですし、子ども向けのスペースが完備されているような飲食店はまだまだ少ない時代でした。そこで、それを兼ね備えて、子どもも親もちょっとリラックスしてくつろげるような場所にしたいと思ってこのお店を立ち上げました。

グルテンフリーにしたのは、長年自分の体調が悪かったことが、どうやら小麦によるもので、自分の体質に合わないということが45歳を超えてわかってきたからです。そういったことに悩まれている方が多い昨今です。同じような方に対応できるケーキ屋、飲食店というのが、まだまだ少ないように思いますので、そういった方にも安心して利用していただけるケーキ屋

やこども食堂でありたいと思っています。

店名の go-on は継続する思いから

私は生野区でお店を構えているんですけども、子育てをしたときに、この地域の方たちにたいへんお世話になったということがあり、そのご恩返しという意味がまずあります。英語で“go on”というのは続くという意味ですが、お客様とのご縁が続きますように、そして来られたお客様の健康が続きますようにという願いも込めています。身体になるべく負担がかからない素材や調理方法など、食べるものも身体に優しいものを提供させていただきたいと思っています。

こども食堂とイベント企画

こども食堂「天使のミール go-on」は、「天使のシフォン go-on」の定休日以外で毎週土日で開催しております。そのなかで、月に何回か絵本の読み聞かせ会とか、いろんなイベントをしていまして、先日は子どもたちに自分たちでシフォンパフェを作ってもらうことを企画して、たくさんのお子さんたちに楽しんでもらえました。子どもたちだけではなく、大人も楽しめるような、学べるような、いろんな企画をこれからもやっていきたいと思っています。

弘本 撮影後に、いろいろなお話をうかがいました。絵本の読み聞かせ会をされている背景には、小さい頃にことばをたくさん聞くとか、絵をたくさん見るような経験をして五感を豊かにしていくことが、試練を乗り越えていく将来の力のもとになっていくだろうという思いがあって、子どもの心のベースを耕していくことに少しでも役に立つのではないかと考えて取り組んでいるとのことでした。

できるだけ親子で来ていただいて、親

御さんにも理解してもらおうことのできる、そういう場所になったらいいなと思っていますとおっしゃっていました。

こども食堂には多くのボランティアの方が協力されていますが、お店は基本的にひとりでされているんですね。地域に恩返しする感覚で、様々なことに取り組まれています。

それから、女性が仕事を続けたり・始めたり、自分らしく生きていくことも応援していきたいという願いもお持ちです。小

さな展覧会も開かれています、有名な会場で有名な作品を発表している方ではなく、これから何かをしたいという方に、小さな一歩を踏み出す場所になったらいいいなという思いで場所を提供していますということでした。

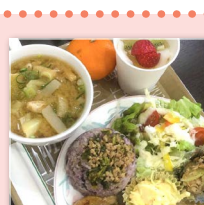
組織的な問題解決のアプローチもとても大事なことです、ひとりで小さな喫茶店でできることってなんだろうという、そういう生活の足元の発想から活動できるのも、素晴らしいことだと思います。



絵本の読み聞かせ

「困難に直面しても、コミュニケーションで解決できる力を育んでいきたい。そのために、大人も子どもも受け入れるコミュニティの場所になればと思っています。異なるルーツを持っても、障がいがあつ

たとしても自分らしく個性を生かして社会に貢献できるような地域でありたい」そんな思いが、藤井さんのお店には込められています。



こども食堂の野菜たっぷり料理



グルテンフリーシフォンケーキ

■ダイアログナイト フリートーク



アイデンティティとは何か

弘本 ここまでのお話から、コミュニケーションの壁を越えていくことの意味合いですとか、そのためには何が必要なのか、心にとまったことばを入りに、お互いに自由に語っていただけたらと思います。

尾中 僕は「自我」っていうことばが印象に残りました。アイデンティティ、宋さんは「開き直り」ということばも使われ、否定的な自己認識をされていた過去を話された。

自分自身も、本当に僕の耳が聞こえなくなったら、この子たちのこと分かるのかになって、考えたことがあります。聞こえる自分が嫌だというふうにも思ったことがあって、今仕事をしているなかでもまだ明確な位置を見つけられずに、自分は何をやっているのかなと思うときがあります。

自我に対して、芽生えるものなんですか、自分で見つけるものなのでしょうか。

宋 自分でアイデンティティを探そうと思っても、自分だけではなかなかできません。人に会い、社会とか自然とかの中で、自分ってこうなってるものなのでしょう。それは複数あってもいいし、それぞれの社会とか他者との関係によって変わったり、ポジションによって変わるときもあるので、固定的に考える必要はないかなと思います。

私には在日コリアンというアイデンティティがあるけども、韓国人だというのは少し違います。30年くらい生野に住んでいると、「大阪人」でよかったりする(笑)。将来的にはアジア人だということにしていけたらいいかなと思います。

私は、塙さんの「むき出しの人間性」ということばが心に刺さったんですけど、みんな喜怒哀楽をもっと出したらいいのに。

4年前に大学生たちと一緒にタイにスタ

ディーツアーに参加させてもらいました。スラムとかも回ったんです。その時、学生たちが夜は対話をして、その話を聞いたんですけど、「こんな本音で話したことは初めてのことだ」とか、「実は自分は友をつくることはしないと思っていたが、タイに来て

いろいろな経験をして、友をつくるのは悪いことではないと思った」といった声がありました。

学生たちは、普段からなかなか本音でしゃべったりしない。それこそむき出しで、恥ずかしい思いをしながら汗かきながらカッコ悪いことも言いながらっていう力はどういうふうにつくっていきけるか。私自身考えたり悩んだりしているところですね。

学習支援で偏差値5〜10上がって、それで何だという思いはあります。そんなことでは、これから私が思っている、沈みゆく日本社会を生き抜くことはできない。だから私も子どもたちに接しているときに、点数を上げることも子どもたちが自信を持ったらいいなということでもやるんだけど、それ以外でどういう力を子どもたちにサポートできるのかというのが悩みですね。

若い頃に「自我感覚」を育てる

塙 シュタイナーが言っている考え方のなかに「自我感覚」っていうことばがあるんですね。彼は、自分が他者に対して言語でいろいろな意思判断する自我ではなく、他者が人間としてそこにいるという感覚のほうで、その人にとって意味があるのだと言っています。その感覚を若い頃にしっかり育てることが大事だと。

自分の学びを育てていくと自ずと自我が育つみたいなのところもあります。アイデンティティというのは他者との関わりのなかで他者の自我を感覚した時にはじめてそれがフィードバックされて自分の感覚が育つ。だから、自分じゃなくて他者に共感したり、悲しんだり、同情したり、喜怒哀楽で心動かしたときに、その像として相手の自我が立ち上がり、それが自分を豊かにす

るのこなっているのは子どもを教えていて強く感じます。

だから、その自我感覚をどう育てていけばいいのかというと、社会で経験を積むなかで教えられていくのは大事だけど、今はなかなか難しい状況。そのときに先ほどの演劇みたいな、舞台という形でそういう場所をつくろうとしているんです。

自我というのは自己中心の感覚じゃなくて他者を感じる感覚だとすると、他者を感じる一番の感覚は、やはり赤ちゃんが生まれて、母体から離れていって、お母さんにだっこされたりお乳を飲んだりというのが原点でしょう。

触覚というのは相手が自分と一緒にであるという感覚と自分とは違うんだという感覚。だから触覚っていうのを幼年期から学童期、むしろ思春期にしっかり育てていくことが大切で、他者を尊重できる存在と理解することで、自分が豊かになると感じています。

尾中 よく言われるものとして、自分を愛せないとか他者を愛せないというのがありますね。他者が人間存在としてそこにいるということを信じられないのは、自分の存在を信じられないことなのかもしれないですね。

塙 まず、そばにいる人を信頼できる、人をリアルに見るっていう感覚が育つと、多分跳ね返って自分を愛せるようになるのかなと思いますね。

コンプレックスを超えていくことから

塙 尾中さんの話で印象的だったことばが「全然不幸と感じなかった」です。ご両親が持たれているすごい存在感があったのでしょね。そばにただで与えられたものが、自我をしっかり育てるのだと思います。

今日のお二人には、ひとつのこだわりみたいなのがあって、そのことがコンプレックスを超えていくという明確な目標になっているように思います。

唐突ですが、私ここでちょっと告ります。ずっと17歳のときから家族以外には言っていなかったことがあったんです。それは、兄がいたんですけども、私が高校の時に自死をしているんです。今でこそ自死遺族も

ケアされていると思うんですけど、当時、いまから40年ほど前の時点では、とても口にはできませんでした。「兄は死んだんだよ、自分で」っていう、1行分ぐらいのことが言えない苦しみ。さすがにある時に辛くなって友人に言ったんですよ、そしたら、「なんだ、そんなことか」と言われたんです。

他人には些細なことだけれども、超えられないものは確かにあった。でも例えば今、お二人に会って、こうやってしっかり聞いてくれる方がいると、それが私を育ててくれると、この年齢になっても言えるんだということを実感しています。今日こんなこと言うつもりは全くなかったんですけど、二人の話を聞いているうちに、思いが溢れ出しました。

日本社会は沈んでいくのか？

塙 そもそも「沈みゆく日本」とか、そのところの認識って大事だと思うんですけど、日本は沈んでいるんですね。

尾中 僕はそこにはいろんな尺度があると思っていて、確かに人口とか経済とかの尺度で見たら縮んでいくのかもしれない。でも自分の尺度自体を変えたらまた違った見方ができる。

宋 僕は、悲観的楽観主義者でありたいと思っていますが、現実はずっと厳しいと感じています。子どもたちの状況を見てみると、例えばフィリピンルーツの子がいます。シングルマザーで、コロナ禍でただでさえ苦しい生活をしていたのにシフトも減ってどうしようかという状態。去年の12月24日のこと、友だち同士でクリスマスに500円ずつ出し合ってプレゼント交換しようというのがあって、中学3年生のその子が出せなかったんですね。その子は日本語があまりできないのもあるし、その気持ちやその子が今度高校に行って日本社会に出て行ったときに、どうなるんだろうと考えると暗澹たる思いになるときがあります。

あるいは、16歳のタイと日本人のダブルの子がいて、親は離婚して、父親はタイで別の家庭を持って日本と行ったり来たりで帰ってこない。生野区のあるところで1人で暮らしていて、昼間は働いて通信制に行っているわけです。

この間日本社会の政治、経済、社会面の劣化が進み、余裕なく寛容さが失われてきているように見えます。

例えば、日本近代でも、努力と能力が実績をつくり、そこで勝ち抜いた人が社会の主流に入っていた。これは、いろいろな意味で社会が流動的になるという肯定的な面もあっただろう。それでも批判的な視点で見ると、じゃあ障害をもっている人はどうか、じゃあ在日のコリアンはどうか。現実には希望してもなれない職種などがいまだにたくさんあるわけです。そういうふうな社会構造の力関係があるなかで、みんな一緒だねって言うのもおかしい。

最近では、例えば東大に行っている学生の親の年収が950万円くらいが多いとか、ある塾のほとんどの人が東大に行くとかで、本当に多様性なんてどこにあるのかと考えたりすると、なかなか厳しい社会になっていくんじゃないかなと思います。



だから、クロスベイスの学習サポート教室で一番大切にしているのは何かというと、子どもたちは「自分のことは自分で決める」。これを最大限尊重するんです。

日本社会の同調圧力は強く、自分のことを自分で決めた経験があまりない人も多い。なので、ひとりで自分はどうだからと、誰かの話をいっぱい聞いてもいいし、親の話を聞いてもいい、クロスベイスのスタッフの話を聞いてもいいけれど、最後には自分で決めるというのは、小学生も中学生にとっても大切なことかなと思ってやっています。

能力主義を越えて、多様な尺度で

尾中 今の宋さんのお話を聞いて、その子のバックグラウンドについて、一般的な差別的な見方を全く廃し、理解しようとすることは、その子自身、自己を肯定できる感覚をもっていけるのかなと思います。

宋 そういうときに、学校の既存の悪しき価値観と同じようなことを地域でやっても意味がない。最近は学校で、足らない「力」のことをよく言います。「学習に向かう力」とか、(はては「人間力」)とまで言う。結局は悪い意味で過度な競争と能力主義が出てく

るんじゃないか。

多文化共生と言って多文化の子どもたちが、差別から共生へ、そこから活躍できる、そういうふうな絵を描いたりする。でも活躍するっていっても、結局そこからもこぼれてしまう子どもたちがどうしても出てくる。そういう子どもたちのことも考える必要があると思います。

尾中 メインストリームの尺度があると思うんですけど、僕もなんかそこから外れようとしたら、おじいちゃんに首根っこつかまれて、いい大学に行っている企業に就職しなさいみたいなのがありました。実際、すごい圧力の中で子どもたちは生きています。そこに、君はもうこの尺度じゃなくていいと、そう言う人がいると、ちょっと自分を肯定できる。

宋 そうですよ。尺度がいくつもあるような、みんなが生きやすい社会が絶対にいい。

「そこにいる」という他者理解

弘本 塙さんが前におっしゃっていた話で面白かったのは、アフリカの焼畑の「半栽培」の世界では「雑草」ということばがないっていう考え方。

塙 今の価値観には、金持ちになりたいとかサラリーマンみたいに安定したいという発想があって、それは社会不安が大きいからだろうけど、実は、自分が何をやりたいのかということがわからない。自分で決めているということがあるわけです。

アフリカの人は少なくともどこかに旅に行くのも勝手に自分で決めている。自分を主張するという態度は、アフリカ大陸全般に通じると思いますが、それは牧畜で生計を立てている人も狩猟採集で暮らしている場合も、都市で生きる人たちもその部分については似ているようです。日本では戸籍法があつてどこに行っても縛られるけど、アフリカでは嫌なら違うところに行けばいいという、自分の空間の選択肢みたいなものがある。そういうのがどこから出てきたかという、やっぱり自然とかかわり方のなかで形成されていった、それを伝統として継承しているんだろうと思うんです。

焼畑は、とにかく森を切り開いて切った火をつけて、そこで作物を栽培するというやり方で、環境を悪化させるネガティブなものもありますが、適正に慣習法に従っている限り、循環するようにできていて、だか

ら続いてきたというロジックがあるんです。そういう人たちを見ていると自然に対する大らかさがあります。

雑草というようなネガティブな概念では、生きている植物たちを捉えない。どんな植物にも、それぞれ名前がついていて、いろんな用途があって、葉草にするとか、ジュースにする、また子どものおもちゃに使うとかいろいろあるんですけども、大地が持っている生命力みたいなものに対して尊重する念がある。価値判断が、全部が「そこにいる」みたいな。これが役立つとか役立たないとかっていう概念ではなく、彼らにとっては、その植物それ自体みたいなおおらかな他者理解があるようです。

宋 今、塙さんの言われる「そこにいる」、それだけで良いねという感覚を踏まえて、そういうセンスを持つというのは大切だになって改めて思いました。これは悩みの一つなんですけど、例えば多様性・ダイバーシティを推奨する。でもその多様性とか共生とかは、多少バラバラでもいいという価値観ですよね。地域のまちづくりは矛盾の塊。理屈ではなかなか通らない。そうするとダイバーシティ、多文化共生というのは一方で遠心力が働く。でも求心力もやっぱり必要なわけですよ。それをどうするのか。例えば日本社会の一部はそれを国というものに求めたりするんだけど、いやそうじゃないと。どういうふうな遠心力と求心力のバランスをとるのが難しい。

塙 日本では、少子高齢化も踏まえながら一人ひとりの弱者をどう人権として認めるのかを今は議論する時期でしょうが、我々がいろいろとかかわっている子どもたちが成人して、大きな心を持つ人たちが大勢出てきたときに初めて制度的な変革にもつながるのではないかと思います。教育にはそういう可能性はあると思っているんです。

尾中 塙さんが、手と足とおっしゃったのが本当にそうだと思う、手足が届く距離の人とは仲良くできるっていうこと。なにか今日、非常に僕わかったんですよ。

「自分は不幸じゃない」っていうことばも、聞かえない両親をもつなかで、僕がそう言うと、「強がり」はわかったみたいな空気が出る。僕は、辛い経験をしたヤングケアラーなんだなあってところがあって、ただそれでも僕はなんで「不幸じゃない」と言えるんだろうってことを考えたんですけど、本当に

その手と足の届く人たちが、介助をしている僕を否定しなかったんですね。そういう地域に僕は暮らしていたっていう経験をもとに幸福を感じているんですよ。

塙 尾中さんのお母さまが、一つ助けていただいたら二つ返したらいいというような、小さい頃から実際に行動で見せながら伝えてきたことは、すごく浸透するだろうと思います。生き方の指針としてされていたことが、周りの方々に母さまの人間性を通して伝わっているとしか思えないですね。

尾中 塙さんが、絵が手話であり、ことばじゃないか、とおっしゃったじゃないですか。表出化している部分、ここにある経験、その共有というのが本当に人間の営みの中にあるんじゃないか。手と足の存在はすごく感じるんです。



上町台地から未来へのブリッジを

弘本 最後は、大阪・上町台地から、これからの社会へのブリッジの可能性について、それぞれの方からメッセージをいただけたらと思います。

宋 塙さんのお話の中で大阪では例えば適塾があり、私塾がたくさんあったという。僕は、今お話を聞いて、一人で藤井さんがやっているように、みんなで50でも100でも私塾を開いたらいいと思う。教えられる人と教える人には、何かできることがあるという非対称的な関係さえあればいい。勉強じゃなくたって、こういう手仕事ができるとか、むしろ無償で師弟関係がつけられるような、私塾がいっぱいできたら楽しい。

弘本 これだけの人が、今日だけでも集まれるんだから十分その素地がありますね。

宋 その時に、絶対こういう話が出てくるんです。呪いのことばだと私は言っているんですが、「それ、おまえ可能か？」って。こういうことばは、人の心をくじく。それこそ自分で沈思黙考して、最終的には自分で決めるということが大切だと思います。

尾中 聞かえない子は、出会う人も少ない

ので、僕にはそれをどうにかしたいという気持ちがあります。今までは、出会いのきっかけはスポーツやアートなんですよ。今日それが手足ってことに気づいた。僕はことばがなくなってもコミュニケーションできるってこと知ってるんです。だから、そういうことをもっと具体化していきたいと思います。

塙 自分のミッション、これだっていう感覚がどこからくるかという、多分上の方から来て胸のあたりから滲み出てくるんだと思うんです。僕は40歳ぐらいの時にそれがきました。自分はいったい何をやっているのかっていう問いとして考えていくと、上から降りてきて身の内において自らを信頼する感覚。これは、いろんなものを、それこそ手を広く広く広げて、つなげる、つなげるというメッセージでもあります。これからも、もちろん大阪をベースにしますが、同時に地域の壁も越えていきたい。さらには、国の壁をも越えていく。そして、地域に限らず、さまざまな先入観を超えることを楽しみながら、教育と芸術の活動に取り組んでいきたいと思います。

弘本 最後に、藤井さんからのメッセージを少し追加させていただきます。ひとつは藤井さんのお店がある生野区にも聴覚支援学校がありますが、遠方から通う方が多いせいか、お店や地域での出会いがないそうです。オープンマインドで、新しい出会いがあればとおっしゃっていました。

それから野菜を使った健康的な料理を子どもたちに食べてもらうことを大事にされています。だからみなさんの活動とも、料理という面で協力できることがあるかもしれませんね、ともおっしゃっていました。

藤井さんの信条として「運は人からやって来る」ということばがあって、そういう人がつながっていく店でありたいとおっしゃっています。お店では、さきほどの無償の師弟関係みたいな形で、お客さん同士が様々なことを伝授するシーンがしょっちゅう繰り広げられているそうです。

みなさまの思いともつながっているところがあると感じ、これからご縁を続けていくことができたらいいなと思います。

今日のこのダイアログが、次の壁を越えていくブリッジになっていくのではという予感と手ごたえを感じつつ、お話をうかがいました。長時間お付き合ひいただきまして本当にありがとうございました。